

# 致平親王年譜——付 関連和歌資料集成——

桜井宏徳

## はじめに

村上天皇の第三皇子致平親王は、天曆五年（九五二）、父帝による天曆の治の最中に生まれ、長じて四品兵部卿に至ったが、天元四年（九八一）に三十一歳で出家を遂げて園城寺に入り、以後、円融朝から後朱雀朝に及ぶ六十年を生き延びて、長久二年（一〇四一）に九十一歳の高齢で天寿を全うした、平安時代史の中でもひとときわ異彩を放つ親王の一人である。

致平親王については、文学はもとより、歴史学の領域においても、従来はほとんど関心が寄せられてこなかったものと思しく、『平安時代史事典』（角川書店、一九九四年）に辛うじて立項されている（関口力氏執筆）ものの、専論は管見に入らない。致平親王の一男で藤原道長の猶子となった源成信は、「照中将」（『今鏡』『愚管抄』）と称され、また「無双美男也」（『系図纂要』）とも謳われた美貌の貴公子で、宮廷の寵児としての颯爽とした姿は『枕草子』の活写するところであり、弱冠二十三歳での出家が『古事談』などに説話化されて伝えられているが、致平親王はその父として、成信について論じられる際にわず

かに言及される程度である。その最大の原因は、九十一年の長きにわたる生涯に比して、致平親王の事跡を伝える史料があまりにも乏少なことにあるものと思われる。

一例として和歌について見れば、致平親王は『新古今集』『続後拾遺集』に各一首ずつが入集しており、その点ではいちおう勅撰歌人と呼びうる存在ではあるが、現在知られる致平親王の歌はこの二首のみである。後述のように、『続古今集』に同母弟昭平親王の作として入集している一首は、実は致平親王の歌である可能性が高いが、それを加えてもわずか三首に過ぎず、致平親王を歌人と称することはやはりためらわれる。『和歌文学大辞典』（明治書院、一九六二年）『和歌大辞典』（明治書院、一九八六年）をはじめ、最新の『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一三年）においても、致平親王の項は立てられていない。

しかし、『新編国歌大観』『新編私家集大成』の語彙検索によってさまざまな歌集の詞書等を仔細に検してゆくと、そこには致平親王の名を意外なほど多く見出すことができるのである。致平親王と歌人たちの交流が最も盛んであり、その周辺での作歌活動も活発であったの

は、元服から出家に至るまでの青年期であるが、和歌との関わりはほぼ生涯を通じて確認される。交流のあった歌人も、藤原元真・清原元輔・藤原相如らの中流官人層から、藤原義孝・斎宮女御徽子女王・大斎院選子内親王らの貴顕まで、階層的にも世代的にもきわめて広範にわたっている。本人の歌こそほとんど残されていないものの、当時の歌壇における致平親王の存在感には、等閑視すべからざるものがあつたのではあるまいか。

まことにささやかな試みではあるが、叙上のような致平親王と和歌との関わりの全体像を明らかにすることは、村上朝から後一条朝に至る撰関期和歌史の一隅に光を当てるとともに、当該期における親王の文学活動への関与のあり方を考える上でも、示唆的な一助となりうるものと思われる。本稿ではそのための基礎的な作業として、致平親王の事跡を可能な限り網羅した年譜を作成し、その生涯を詳らかにするとともに、関連する和歌資料の集成をも試みた。

前述のように、致平親王に関する史料は少なく、信憑性にやや疑問の残る後代の文献に依拠せざるをえなかつたところも少なくない。また、『大日本史料』が未刊の長元四年(一〇三二)七月以降を中心に、史料の見落としや誤読なども多々あるうかと懸念される。今後の補訂を期しつつ、現時点での調査結果を若干の私見を交えて公表し、大方のご批正とご教示とを乞う次第である。

### 【例言】

一、致平親王の事跡に関する事項を編年に記す。致平親王の家族及び関係者の動静などの関連事項についても必要に応じて記したが、その他の一般的な歴史的・社会的事象は原則として省略した。

一、人物の生年は典拠から逆算し、官位その他の肩書は当該時点のものによつた。死亡記事の( )内のアラビア数字は享年である。享年の記載がない人物は生年不詳。

一、年時不明のものが多く和歌に関する事跡については、年時の推定がある程度可能なものに限って記した。

一、補足・付記すべき事柄や若干の考察などを、適宜▼印に続けて記した。

一、典拠は左記の通りである。「」内の略号の漢音による五十音順に配し、( )内に依拠したテキストを示した。複数の史料に同一の事跡が見える場合は、典拠は主要なもののみを挙げ、史料によつて日時に相違がある場合は、最も信憑性が高いと思われるものに従つた。

〔栄〕『栄花物語』(新編日本古典文学全集)

〔外〕『主上御元服上寿作法抄』所引『外記記』(群書類従)

〔関〕『関寺縁起』(大日本仏教全書)

〔紀〕『日本紀略』(新訂増補国史大系)

〔義〕『義孝集』(新編私家集大成)

〔九〕『九曆』(大日本古記録)

- 〔御〕『御堂関白記』（大日本古記録）
- 〔魚〕『魚魯愚抄』（史料拾遺）
- 〔系〕『系凶纂要』（名著出版（新版））
- 〔権〕『権記』（史料纂集）
- 〔元〕『元輔集』（新編私家集大成）
- 〔公〕『公卿補任』（新訂増補国史大系）
- 〔左〕『左経記』（増補史料大成）
- 〔斎〕『斎宮女御集』（新編私家集大成）
- 〔三〕『三十六人歌仙伝』（冷泉家時雨亭叢書）
- 〔寺〕『寺門伝記補録』（三井寺法燈記）
- 〔拾〕『拾遺和歌集』（新編国歌大観）
- 〔春〕『春記』（増補史料大成）
- 〔小〕『小右記』（大日本古記録）
- 〔親〕『親信卿記』（陽明叢書）
- 〔西〕『西宮記』（神道大系）
- 〔蜻〕『蜻蛉日記』（新日本古典文学大系）
- 〔相〕『相如集』（新編私家集大成）
- 〔僧〕『僧綱補任』（僧歴綜覧（増訂版））
- 〔統〕『統古今和歌集』（新編国歌大観）
- 〔体〕『体源抄』（日本古典全集）
- 〔大〕『大間成文抄』（吉田早苗校訂『大間成文抄』吉川弘文館）
- 〔中〕『中古歌仙三十六人伝』（群書類従）

- 〔天〕『天祚礼祀職掌録』（群書類従）
  - 〔伝〕『伝法灌頂血脈譜』（園城寺文書）
  - 〔百〕『百鍊抄』（新訂増補国史大系）
  - 〔扶〕『扶桑略記』（新訂増補国史大系）
  - 〔法〕『法中伝系部類』（東京大学史料編纂所蔵史料目録データ  
ベース）
  - 〔本〕『本朝皇胤紹運録』（群書類従）
  - 〔遊〕『御遊抄』（続群書類従）
  - 〔裏〕『大鏡裏書』（日本古典文学大系）
- 一、致平親王に関連する和歌資料を集成し、『年譜』の後に【関連和歌資料集成】として付載した。致平親王の生涯を、
- I 誕生から元服まで（天曆五年〈951〉～康保二年〈965〉）
  - II 元服から出家まで（康保二年〈965〉～天元四年〈981〉）
  - III 出家とその波紋（天元四年〈981〉）
  - IV 出家から入寂まで（天元四年〈981〉～長久二年〈1041〉）
- の四期に区分し、それぞれの時期に詠まれた致平親王の歌、また致平親王をめぐる詠まれた歌を集成し、ほぼ編年に配列したものである。引用は、勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』に、私家集は『新編私家集大成』に、『栄花物語』は新編日本古典文学全集にそれぞれ扱ったが、仮名に漢字を当て、片仮名を平仮名に改め、仮名遣いを歴史的仮名遣いに統一するなど、適宜私に表記を改変した。

【年譜】

天曆五年 (951) 一歳

この年、村上天皇の第三皇子として誕生。「春扶」母は中納言藤原在衡女の更衣正妃（按察御息所）。同母姉に第三皇女保子内親王（天曆三年（949）生）がいる。〔栄本〕

天曆六年 (952) 二歳

この年、真魚始。清原元輔、賀歌を詠む。〔元〕▼【関連和歌資料集成】①参照。藤本一恵 [1989]・後藤祥子 [2000 ↑ 1994] は前年のこととするが、当時真魚始は生後満二十ヶ月目に行われるのが通例とされていた『九曆』天曆五年（951）十月二十六日条）ことに鑑みて、当年のことと推定した。真魚始については、中村義雄 [1962] 参照。致平親王の外祖父藤原在衡の室が清原高峯（高奈とも）女であった縁で、元輔が在衡・正妃父娘及び正妃所生の皇子女たちに親昵していたことについては、後藤祥子 [2000 ↑ 1994] に詳しく。

天曆八年 (954) 四歳

この年、同母弟昭平親王（第九皇子）誕生。〔紀〕

天曆十年 (956) 六歳

十一月五日、保子内親王とともに参内。〔西公〕

天徳二年 (958) 八歳

一月三日、東宮憲平親王（冷泉天皇）・広平親王とともに参観。〔九紀〕▼憲平親王（第二皇子）・広平親王（第一皇子）はともに致平親王の異母兄。

天徳五年／応和元年 (961 / 2.16改元) 十一歳

この年、母更衣正妃、外祖父大納言在衡の七十賀を催すか。〔元〕▼『元輔集』の詞書には「八十賀」とあるが、在衡は七十九歳で薨じている（天禄元年条参照）ので不審。「七十賀」の書き誤りではないかとする藤本一恵 [1989] の推定に従う。

応和二年 (962) 十二歳

七月九日、小弓の負態を供する。〔西〕

応和三年 (963) 十三歳

一月三日、憲平親王の東宮朝覲に参上。〔西〕

康保二年 (965) 十五歳

七月二十八日、相撲召合に際し、申日により着陣せず、簾中に候して見物する。〔小〕▼『小右記』長和二年（1013）七月二十八日条の割注に「康和二年例」として引かれている記事による。致平親王が申日であることによって着陣しなかった理由は判然としないが、末松剛

氏のご教示によれば、相撲召合の儀式本来の都合によるものではなく、親王ゆえの別格扱いによって、抽象的な理由ながらも儀式への参列を免除され、簾中での見物を許可されているのであろうという。なお、当該記事では「上野太守致平親王」と記されているが、上野太守任官は十月二十八日の元服以後のことであろう。

十月二十八日、清涼殿において元服。加冠は中納言源兼明、理髪は頭中将源延光。〔紀遊〕

### 康保三年 (966) 十六歳

一月一日、小朝拝に参上。これ以前、上野太守に任じられる。〔西〕

▼『西宮記』の同年十月七日の記事には、異母弟為平親王(第四皇子)が「上野太守親王」として見えており、致平親王はこれ以前に上総太守に遷任したものとみられる。上総太守としての初見は、安和二年(969)九月二十三日(同年条参照)。

### 康保四年 (967) 十七歳

五月二十五日、父村上天皇(42)、清涼殿において崩御。〔紀〕

七月二十五日、母更衣藤原正妃卒去。〔紀〕▼正妃は美貌ながらや古風な人柄であったとされ、常軌を逸した振る舞いも伝えられている(『栄花物語』「月の宴」)。長く村上天皇の勘気を蒙っていたこともあり(『拾遺集』雑恋・一二五九・一二六〇)、あまり評判の芳しい人物ではなかったらしい。とはいえ、中宮安子の三男四女に次ぐ二男一

女を儲けていること、天皇との細やかな贈答歌も伝えられていること(『村上御集』九九〜一〇一。うち九九・一〇〇は『新勅撰集』に入集(恋五・一〇一五・一〇一六)などから見れば、ことさらに帝寵の薄い薄倖の妃をイメージするには及ばないであろう。正妃については、内田千代子 [1961]・高橋由記 [2010] 参照。

七月、四品に叙せられる。〔法〕

### 康保五年／安和元年 (968 / 8.13改元) 十八歳

十一月二日、師貞親王(花山天皇)の七夜の産養に際し、銀の雉を造らせ、清原元輔の歌を付けて贈る。〔拾〕▼【関連和歌資料集成】

③参照。師貞親王は致平親王の甥。『拾遺集』の「贈皇后宮」を花山天皇の母藤原懐子とする小町谷照彦 [1990] の推定に従う。

### 安和二年 (969) 十九歳

九月二十日、帯剣を許される。〔紀系〕

九月二十三日、円融天皇の即位式において、左侍従(擬侍従)を務める。これ以前、上総太守に任じられる。〔天〕▼円融天皇は致平親王の異母弟(第五皇子)。

### 安和三年／天禄元年 (970 / 3.25改元) 二十歳

五月八日、小治田(豊原)有秋卒去。致平親王の笙の師という。〔体〕  
十月十日、外祖父左大臣藤原在衡(79)薨去。〔扶公〕

天禄二年 (971) 二十一歳

七月五日、藤原義孝、右近衛少将に任じられる。〔中〕これ以後、天延二年 (974) 九月十六日の義孝の死までの間に、致平親王、義孝の名を騙ってその愛人衛門内侍 (命婦とも) のもとを訪れ、義孝に恨まれる。〔拾義〕▼【関連和歌資料集成】④参照。年時の推定は、徳植俊之〔1985〕による。なお、『中古歌仙三十六人伝』は「左近少将」とするが、これは「右近少将」の誤りで、左近衛少将は義孝の双子の兄孝賢である。

十二月十五日、兵部卿に任じられる。〔法〕

天禄三年 (972) 二十二歳

一月五日、円融天皇の元服の儀の後宴に列する。〔外〕

天延二年 (974) 二十四歳

九月十六日、右近衛少将藤原義孝 (21) 卒去。〔親蜻〕

十一月二十五日、藤原相如、六位藏人となる。〔親〕これ以後、致平親王出家までの間の某年八月、致平・昭平両親王、作文会を催す。相如参会。〔相〕▼【関連和歌資料集成】⑦参照。年時の推定は、後藤昭雄 [2005 → 1981 → 1973] による。福井迪子 [1987 → 1975] は、『相如集』の詞書に見える「九の宮」という呼称がその時点でのものであるとすれば、昭平親王が源朝臣姓から親王に復した貞元二年 (977) 四月二十一日 (『日本紀略』同日条) 以降にさらに年時を絞り

込むことも可能であるとしている。

十二月十八日、清涼殿における仁王経転読の結願に参列。〔親〕

天延四年／貞元元年 (976 / 713改元) 二十六歳

一月二十日、大宰帥に任じられる。〔法〕▼致平親王は出家まで兵部卿に在官しており、この大宰帥は兼任であろう。兵部卿と大宰帥を兼任した親王としては、致平親王の異母兄広平親王の例がある (『日本紀略』天禄二年 (971) 十月八日条)。

貞元三年／天元元年 (978 / 1129改元) 二十八歳

十月十七日、致平親王の年給により、伴利主 (利生とも) を丹波権掾に任じる。〔大魚〕▼『魚魯愚抄』には前年の貞元二年 (977) の任とし、丹波掾とする記載も見られるが、『大間成文抄』に従う。年給に関する記事は、「二合」「名替」「国替」「名国替」「更任」など、年給制度の運用上の諸問題と密接かつ複雑に関わっており、稿者の理解の及ばない点も少なくないので、以下、煩雑を避けて最終的に任官された人物とその官職のみを記す。年給制度及びその運用の詳細については、時野谷滋 [977] に、また、親王給については、尾上陽介 [1991] に詳しく。近年の年官に関する論考としては、尾上陽介 [2001]・磐下徹 [2011] などがあり、特に、年官制度を人事権という新たな観点から捉え直した磐下論文は注目される。なお、補任の日付は『大間成文抄』『魚魯愚抄』にはほとんど明記されていないため、多くは『大



『日本史料』の推定による。

天元二年(979) 二十九歳

この年、一男源成信(のち藤原道長猶子)誕生。母は左大臣源雅信女。「権榮」▼致平親王室となった雅信女については、『栄花物語』に「左大臣殿の外腹の女」「みはてぬゆめ」「大殿の上の御異はらから」「浦々の別」とあることから、道長室倫子の異母姉妹であることが知られる。致平親王は道長より十五歳年長であり、その室も倫子の異母姉と見るのが妥当であろう。『権記』長保三年(1001)二月四日条は成信について「入道兵部卿致平親王第二子」と明記しているが、末松剛氏のご教示によれば、ここでいう「第二子」とは、男女を通じた二番目の子の意であり、二男の意ではないという(男女を区別する場合「二男」「二女」と記すが、異腹であることを厳密に区別する史料(母方基準で記されたもの)ではこの数字が異なってくる由)。『平安時代史事典』の「源成信」の項(関口力氏執筆)も成信を一男としている。『栄花物語』が成信と一歳年下の弟永円について、「男宮たち二人おはしましける」「みはてぬゆめ」「御男子二人おはすなる」「浦々の別」としていることから見ても、成信が一男、永円が二男であることは動かないであろう。なお、『本朝皇胤紹運録』『尊卑分脈』『系図纂要』などは、致平親王の子として成信・永円のほかに致信(従四位下右近衛中将)を掲げているが、該当する人物は同時代史料に見出せず、存在そのものが疑わしい。

天元三年(980) 三十歳

この年、二男永円誕生。「扶僧」母は源雅信女。「栄伝」▼『系図纂要』は成信の法名を永円としているが、笹川博司[2004]・高橋由記[2008]が指摘するように、『権記』長保四年(1002)八月十四日条に、行成が永円に会って成信の安否を尋ねている記事が存することから、両者は明らかに別人である。天元二年条で述べたように、永円は致平親王の二男と見るのが妥当であり、「入道兵部卿致平親王第二息」とする『伝法灌頂血脈譜』が正しいが、『扶桑略記』は「入道兵部卿致平親王第二子也」とし、彰考館本『僧綱補任』も「兵部卿致平親王第二子」としている。これらは、第二子で一男の成信と、二男永円との混同がすでに始まっていたことを示すものであろうか。

天元四年(981) 三十一歳

五月十一日、中山において出家、園城寺に入る。「紀扶」法名は悟円。権少僧都余慶に師事し、阿闍梨慶祚・禅耀に学ぶ。「寺」致平親王の出家に際し、清原元輔、中務と贈答歌を交わし、保子内親王に歌を贈る。「元」徽子女王、伊勢から致平親王に、次いで保子内親王に歌を贈る。「斎」▼【関連和歌資料集成】⑧⑨参照。致平親王の出家後の動静については不明な点が多く、法名を悟円と称したことをはじめ、園城寺内の明王院に住んで「明王院宮」(『本朝皇胤紹運録』)あるいは「法三宮」「明王院御室」(『伝法灌頂血脈譜』『法中伝系部類』)などと号したこと、円満院門跡ないし平等院(園城寺の別院。宇治の平

等院とは別物)門跡の祖であること(『諸門跡譜』『釈家官班記』)などの所伝は、いずれも同時代史料からは確認できない。円満院は、『春記』長久元年(1040)十二月十三日条の記事によって、大僧正明尊が園城寺の住房を後朱雀天皇の御願堂とし、円満院と称したことに始まることが知られており、致平親王の創建ではありえない。酒井彰子[1995]は、致平親王の二男永円が平等院の創建に関わった可能性を指摘しつつ、致平親王が円満院の開祖に仮託されたのは、円満院の門跡譜が、平等院の管領から独立したのち、平等院の門跡譜に基づいて作成されたためではないかとしている。また、『平安時代史事典』の「明王院②」の項(竹居明男氏執筆)によれば、園城寺の子院である明王院は、致平親王没後の承暦四年(1080)に勅命によって法印増誓が建立したものであり、致平親王が明王院に住んだとする所伝も疑わしい。なお、『本朝皇胤紹運録』のみ「天元三五十一出家」としているが、これは「天元四」の誤りであろう。

十一月二十九日、権大僧都余慶、法性寺座主に任じられる。山門派、これに反発して強訴し、十二月七日には関白藤原頼忠邸に乱入。余慶は辞退を余儀なくされる。〔小(小記目録)僧〕▼致平親王の師余慶は、寺門派を代表する高僧として常に山門派との激しい対立抗争の渦中にあり、翌天元五年(982)一月には、山門派の天台座主良源が余慶らの殺害を企てているという噂が流れたほどであった(『扶桑略記』同年一月九日条)。出家後ほどなく発生したこの騒動は、致平親王にも大きな衝撃を与えたものと推察されるが、それを伝える文献は残され

ていない。なお永祚元年条も参照されたい。

天元六年／永観元年(983／4.15改元) 三十三歳

一月二十七日、致平親王の年給により、豊原雅方を丹波権掾に任じる。〔大〕

永観二年(984) 三十四歳

この年、常陸太守昭平親王出家。園城寺に入り、のち岩藏の大雲寺に移る。〔本〕

永観三年／寛和元年(985／4.27改元) 三十五歳

九月十四日、致平親王の年給により、源鎮を丹波権掾に、藤原致節を内舎人に任じる。〔大〕

この年、徽子女王(57)卒去。〔裏〕

寛和二年／永延元年(987／4.5改元) 三十七歳

二月二十四日、官旨によって入壇、大僧都余慶より灌頂を授けられる。〔伝法〕

八月二十一日、保子内親王(39)薨去。〔紀扶〕致平親王、これ以前に土佐に下向。離京に先立ち、清原元輔の桂山荘で保子内親王と別れを惜しむ。〔元〕▼【関連和歌資料集成】①参照。保子内親王は寛和二年(986)ころ摂政藤原兼家と結婚したものの、兼家の愛の衰え



を恥じて心痛のあまりに死去し、物の怪となって兼家に祟ったという  
『栄花物語』「さまざまのよろこび」。結婚後に出家したとも伝えら  
れる（『一代要記』）。なお、保子内親王の生涯については、『源氏物語』  
への投影を中心とする論ではあるが、金田元彦〔1989↑1980〕に詳  
細な考察がある。

永延三年／永祚元年（889／88改元） 三十九歳

九月二十九日、大僧都余慶、天台座主に任じられる。山門派、これ  
に反発して宣命を破却し、宣命使少納言源能遠を追い返す。余慶は重  
ねて宣命を受けるが、十二月二十七日に辞任。（『紀百』）

永祚二年／正暦元年（900／11.7改元） 四十歳

六月、肥後守清原元輔（83）卒去。〔三系〕▼元輔の享年については、  
近年、徳原茂実〔2006〕が十年ほど減じて七十三歳程度とする新たな  
仮説を提示しているが、通説に従う。

正暦二年（991） 四十一歳

閏二月十八日、権僧正余慶（73）入寂。（『紀扶』）

正暦五年（994） 四十四歳

このころ、昭平親王とともに岩蔵の大雲寺に住むか。〔栄〕▼『栄  
花物語』は、致平親王は出家後大雲寺に住んでいたと考えていたらし

く、正暦五年（994）の記事に「村上の先帝の九の宮、入道して石蔵  
にぞおはします、また兵部卿宮と聞えさする、御同じはらからに三の  
宮と聞えさせし、それも入道して同じ所におはします」（「みはてぬゆ  
め」）、また長徳四年（998）の記事にも「村上帝の三の宮に、兵部卿  
宮と聞えしが、入道して石蔵におはしけるが」（「浦々の別」）とあり、  
園城寺に住んだことには言及していない。致平親王が大雲寺に住んだ  
ことは他の史料には見えないが、あるいは一時期園城寺から大雲寺に  
移って、同母弟の昭平親王とともに住んだことがあったのであろう  
か。この点について、松村博司〔1969〕は致平親王が園城寺から大雲  
寺に移ったことを『本朝皇胤紹運録』が脱したのではないかと推定し  
ている。

正暦六年／長徳元年（995／2.22改元） 四十五歳

五月二十九日、前出雲守藤原相如卒去。〔栄〕

長徳二年（996） 四十六歳

九月四日、致平親王の年給により、大鹿衆忠を山城権少掾に任じる。  
〔大〕

長徳三年（997） 四十七歳

一月二十八日、致平親王の年給により、大原弘胤を周防掾に任じる。  
〔大〕

長徳四年 (998) 四十八歳

一月二十五日、致平親王の年給により、大日置栄光を山城権少掾に任じる。〔大〕

の法華十講を修するため、園城寺に参詣、致平親王と対面。大阿闍梨慶祚同席。〔御小〕

長保二年 (1000) 五十歳

十二月二十三日、園城寺において右大弁藤原行成と対面。〔権〕

寛仁三年 (1019) 六十九歳

十二月二十二日、大阿闍梨慶祚 (67) 入寂。〔小扶〕▼慶祚の享年については、七十三歳あるいは六十五歳とする異説もあるが、『右記』に従う。

長保三年 (1001) 五十一歳

二月四日、一男右近衛権中将源成信出家、園城寺に入る。〔権紀〕

万寿二年 (1025) 七十五歳

五月十六日、関寺を訪れ、靈牛を見る。〔関〕

平親王・成信と対面。〔権〕

万寿四年 (1027) 七十七歳

十二月四日、入道前太政大臣藤原道長 (62)、権大納言藤原行成

寛弘六年 (1009) 五十九歳

八月十四日、権中納言藤原行成、阿闍梨莊命を介して、致平親王に中務卿具平親王 (46) の薨奏 (七月二十八日薨去) について伝える。

(56) 薨去。〔小紀〕

〔権〕▼具平親王は致平親王の異母弟 (第七皇子)。

長元四年 (1031) 八十一歳

九月二十二日、賀茂斎院選子内親王退下、二十八日出家。〔小左〕

長和二年 (1013) 六十三歳

六月二十八日、昭平親王 (60)、大雲寺において入寂。〔紀〕

致平親王、選子内親王と対面、歌を贈る。〔栄統〕▼【関連和歌資料集成】⑭参照。選子内親王は致平親王の異母妹 (第十皇女)。

長和六年／寛仁元年 (1017 / 423改元) 六十七歳

十月二十八日、前摂政藤原道長、智証大師円珍の遠忌 (二十九日)

長元八年 (1035) 八十五歳

六月二十五日、前斎院選子内親王 (72) の葬送 (二十二日薨去) に

際し、成信、前伊賀守源光清とともに遺骨を園城寺に持参、選子内親王御願の御堂の立つところに安置。〔左〕▼所京子〔1989↑1984〕は、成信はずっと選子内親王に付き添っていたのであろうとし、また、選子内親王が園城寺に御堂を造らんとしたのは兄致平親王との縁によるものであるとしている。この年、成信は五十七歳。これが成信の生存を確認しうる最後の記録であり、以後の消息は不明。成信の生涯については、関口力〔2007↑1983〕・三上啓子〔1990〕・笹川博司〔2004〕・高橋由記〔2008〕参照。

長久二年（1041） 九十一歳

二月二十三日、入寂。〔春扶〕▼入寂の日付について、『扶桑略記』は「二月廿日」とするが、『春記』二月二十四日条に「或人云、昨日入道致<sup>平カ</sup>・親王入滅了云々」とあるのに従う。

三月十六日、権中納言藤原資平・頭中将藤原資房父子、園城寺を訪れ、前大僧正永円を弔問。〔春〕

長久五年／寛徳元年（1044 / 1124 改元）

五月二十日、前大僧正永円（65）入寂。〔扶僧〕

永承五年（1050）

二月二日、故致平親王の年給により、上道忠職を備前掾に任じる。

〔魚〕

永承六年（1051）

一月二十七日、故致平親王の年給により、丹波頼実を大宰権少監に任じる。〔大〕

天喜四年（1056）

二月三日、故致平親王の年給により、酒部行貞を讃岐掾に任じる。〔魚〕

天喜五年（1057）

十一月四日、故致平親王の後家の申請によって、致平親王の年給により、高階時頼を鎮守府軍監に任じる。〔魚大〕▼飯沼賢司〔1992〕によれば、十一世紀以降、「後家」という語は、「後継者」「家族」の意味をも残しつつ、次第に「妻」を指すようになってゆくとされる。ここでいう「後家」も『史料綜覧』の網文のように「致平親王室」と断定することはできないが、仮にこの「後家」が成信を生んだ雅信女であるとすれば、致平親王の出家から七十六年を経て、百歳前後の長寿を保つてなお健在であったことになる。

【関連和歌資料集成】

I 誕生から元服まで（天曆五年〔951〕～康保二年〔965〕）

①『元輔集』（冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本）

兵部卿親王のいをたうべはべりしに

ぬまのうみに釣りせしあまも今日よりぞを千とせをまつの江に渡るらん (二二七)

▼【年譜】天曆六年条参照。第一句「ぬまのうみに」は他に用例を見ない表現で、書陵部蔵御所本三十六人集は「ぬまのめに」・正保版本歌仙歌集は「あま舟に」とする。詞書は歌仙歌集本には「兵部卿親王の、はじめていをまゐりける日」とある。

②『元真集』（西本願寺本三十六人集）

三宮にこちまきたてまつるとて

五月待つほどにさはみづまさりつつ淀の真菰もおいにけるかな

(二七八)

▼詞書に「三宮」とあることから見て、致平親王の元服・任官以前に贈られた歌であろう。西本願寺本は「さはみづ」の「つ」を欠いており、他本によって補う。詞書の「こちまき」は他に用例を見ない語で、冷泉家時雨亭文庫蔵「元真集」（以下、冷泉家本）・冷泉家時雨亭文庫蔵資経本（以下、資経本）・書陵部本三十六人集（以下、書陵部本）には「うちまき（打撒の意か）」とあり、書陵部本を引く『大日本史料』は「う」を「衍カ」として「致平親王ニ茅卷ヲ上ル」と注している。「ちまき（粽・茅卷）」は「真菰」の葉で巻いて蒸し、「五月」五日の端午の節句に食するものであるから、歌意から見ても『大日本史料』の推定は妥当と思われる、伝俊成筆本の詞書には「ちまき」とある。また、第五句「おいにけるかな」について、『新編国歌大観』は「おひにけ

るかな（生ひにけるかな）」と解しているが、「老いにけるかな」の可能性もある。西本願寺本では、この歌の後に「こがくれて五月待つ間の時鳥しのびて鳴けど声つきぬべし」（一七九）という歌が詞書なしで続いているが、冷泉家本・資経本・書陵部本・伝俊成筆本では一七八番歌と一七九番歌との間に「人にやる」という詞書が記されているため、本稿では一七八番歌のみを「三宮」に贈られた歌と判断して掲出した。以上、本文異同及び解釈については、多くを浅田徹氏のご教示に負う。なお、この歌の数首後には、「三宮御息所、子の日若菜をたてまつる」という詞書を持つ二首もあり（一八三・一八四）、これは元真が致平親王の母正妃のために詠んだものである。このとき若菜を贈られた相手は「中宮」（藤原安子）であることが、冷泉家本・資経本・書陵部本・伝俊成筆本の詞書から知られる。

Ⅱ 元服から出家まで（康保二年〈965〉～天元四年〈981〉）

③『拾遺和歌集』（京都大学附属図書館蔵中院本）

贈皇后宮の御産屋の七夜に、兵部卿致平のみこの雉のかたをつくりて、たれともなくて歌をつけて侍りける 清原元輔

朝まだき桐生の岡に立つ雉は千世の日つぎの始めなりけり

(賀・二六六)

▼【年譜】安和元年条参照。『拾遺抄』にも収められており（賀・一六六）、その詞書に「しろかねの雉」とあることから、この「雉のかた」が銀製であったことが知られる。この歌は現存の『元輔集』諸本には

見られないが、後代の『定家八代抄』（賀・六一二）『歌枕名寄』（九三七一）などにも採られている。

④『拾遺和歌集』（京都大学附属図書館蔵中院本）

同じ少将通ひ侍りける所に、兵部卿致平のみこまかりて、「少将の君おはしたり」と言はせ侍りけるを、のちに聞き侍りて、かのみこのもとにつかはしける

あやしくもわが濡れ衣を着たるかな三笠の山を人に借られて

（雑賀・一一九二）

▼【年譜】天禄二年条参照。「同じ少将」は藤原義孝。『義孝集』（冷泉家時雨亭文庫蔵承空本）には「衛門内侍のもとに、この少将と名乗りて、宮のおはしたりと聞きて言ひやる」という詞書で載る（一八）。片桐洋一・三木麻子・藤川晶子・三木麻子〔2010〕は、この「衛門内侍」（九州大学図書館蔵本などは「左衛門督の命婦」とする）がのちの致平親王室（源雅信女）である可能性が高いとするが、確証はない。なお、当該歌は『実方集』にも「通ひ侍りける女のもとに、実方と名乗りて、人のまかりたりけるを聞きて」という詞書で実方の歌として収められているが（二七七）、仁尾雅信〔1979〕は実方が借用した義孝歌が『実方集』に混入したのではないかと推定しており、以後の『義孝集』『実方集』の注釈もそれに従っている。

⑤『新古今和歌集』（谷山茂蔵本）

女のほかへまかるを聞きて

思ひやる心もそらにしら雲の出で立つ方を知らせやはせぬ

兵部卿致平親王  
（恋五・一四一四）

▼④と同様に、若き日の致平親王の恋の一齣を伝える一首。なお、『大式高遠集』に、当該歌と第一句・第二句を同じくする「思ひやる心もそらになりけりひとり有明の月をながめて」（二五七）という歌があるが、これは『長恨歌』の句題による十首のうちの一首である（詞書「行宮見月傷心色」）。中川博夫〔2010〕は、高遠歌の「思ひやる心もそらに」という表現の「同時代の例」として致平親王歌を挙げている。

⑥『安法法師集』（書陵部蔵甲本）

兵部卿宮にて、雨中花といふ心を

そほつとも花の下にを宿はせんにはふ雲に心染むべく  
（八三）

▼詞書の「兵部卿宮」について、北村杏子〔1986〕が「致平親王をさすと思われる」とし、犬養廉・後藤祥子・平野由紀子〔1994〕も「致平親王か」としているのに対して、小野美智子〔2000〕は致平親王よりも章明親王（醍醐天皇の皇子）の方がふさわしいとする異説を提示している。にわかには決しがたいが、致平親王説に従う。

⑦『相如集』(内閣文庫蔵本)

兵部卿宮御前に、人々多かるに、もていでてはじめよりのことを  
語り聞こえわづらふ、「いと口ごはかりけり」とて

にくげなる朝顔よりは鏡草心を見るに思ひかかりぬ (二二九)

逢ひがたきことなん思ひぬるとて、「今はすまひとらん」と言へ  
ば、女

朝顔のうつるばかりの鏡草思ひかかるは負くるなるべし (四〇)

「何事にも勝つことあらじ」とは言へり、男

負くるとし人の思はば同じ名を玉巻く葛となかを出でなん (四一)

八月に、兵部卿宮・九の宮、人々あまたしてふみつくる、「草む  
らに鳴く虫声高けれど、鳴く雁よりは」といふ題を、声はいと聞  
きにくし、人々笑ひて、例の人

草むらに鳴く虫よりは高けれどよくも聞こえぬ雁のひと声 (四二)

すけゆき

われもまたたまづさかけぬ雁なれば病去る間の声にやあるらん

(四四)

女

いかでかはかりにもかけんたまづさを作りわづらふ君とこそ聞け

(四五)

返し

たましひもなくなるまでにひと日わが言ひ殺してし人は生けるか

(四六)

▼【年譜】天延二年条参照。『相如集』に見られる、相如と保子内親

王(致平親王の同母姉)の女房との一連の贈答歌のうち、致平親王が  
居合わせた場において詠まれたことが確実なもののみを掲出した。三  
九・四一・四四・四六番歌が相如の、四〇・四三・四五番歌が女房の  
歌である。この女房について、木船重昭 [1992] は「女蔵人」とする  
が、本文には「御格子上ぐる人」とあるのみで、女蔵人であったこと  
を示す明証はない。また、四三番歌の詞書に見える「九の宮」は、致  
平親王の同母弟昭平親王である。相如については、福井迪子  
[1987・1975]・北村杏子 [1985] に詳しい。なお、『大日本史料』が  
『相如集』の「兵部卿宮」を広平親王とするのは誤り。

Ⅲ 出家とその波紋(天元四年(981))

⑧『元輔集』(冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本)

兵部卿の宮、入道しはべりしとき、中務がよみてはべりし

暮るる間も恋しかりける月かけを入るる山辺のつらくもあるかな

(一一二六)

中務がよみてはべりし、返し

月かけを入るる山辺はつらからで思ひたてけむ世をぞ恨むる

(一一二七)

女三宮のもとにまかりて、よみはべりし

世を捨てて山へ入る月入らましや昔の空の曇らざりせば (一一二八)

▼【年譜】天元四年条参照。中務の歌は現存の『中務集』には見えない



い。「女三宮」は致平親王の同母姉保子内親王。

⑨ 『齋宮女御集』(冷泉家時雨亭文庫蔵本「齋宮女御集」)

兵部卿宮、入道し給へりしに、伊勢より

かからでも雲居のほどを嘆きしに見えぬ山路を思ひやるかな

(一三六)

女三宮の御草子書かたてまつらせ給ひけるに、葦手長歌など書

かせ給ひて、同じ心

みな人のそむきはてぬる世の中にふるのやしらの身をいかにせむ

(一三七)

▼【年譜】天元四年条参照。一三六番歌は「兵部卿元良親王かしらおろしてのち、伊勢より申しつかはしける」の詞書で『統後撰集』に入集しているが(雑下・二〇九)、「元良親王」は「致平親王」の誤り。また、一三七番歌は「兵部卿宮入道して侍りけるころ、母三宮のもとへ」の詞書で『統詞花集』に(雑下・八九九)、「草子に、葦手長歌など書きて、奥に」の詞書で『新古今集』に(雑下・一七九六)、それぞれ入集している。『統詞花集』の詞書の「母三宮」は保子内親王を指すものであり、「女三宮」あるいは「姉三宮」が正しい。

IV 出家から入寂まで(天元四年(987)〜長久二年(1041))

⑩ 『齋宮女御集』(冷泉家時雨亭文庫蔵本「齋宮女御集」)

兵部卿宮四君

常盤なる松につけてもとふやとていくたび春を過ぐし来ぬらん

(一五九)

御返し、女御

かく見する折もやあると藤の花待つにかかれる心なりけり (一六〇)

▼詞書の「兵部卿宮四君」について、平安文学輪読会[1981]は「致平親王の第四女かとも考えられる」とし、吉野瑞恵[2012]も「兵部

卿致平親王(村上天皇第三皇子)の四女の意か」としているが、やや

疑問が残る。前述のように、致平親王の第二子にして一男である成信

が誕生したのは天元二年(979)のことであり、第一子は女子であつ

たと考えられるが、致平親王は成信の誕生から二年後の天元四年

(987)に出家しており、この「四君」が致平親王の子であるとすれば、

二年の間に三人の女子と二男永円が誕生していたことになる。さら

に、徽子女王は致平親王の出家から四年後の寛和元年(985)には死

去しており、五歳にも満たない幼女がそれまでの間に徽子女王と贈答

歌を交わしたと考えるのは無理が大きいように思われる。あるいは女

房などによる代作でもあろうか。不審ではあるが、ここでは「兵部卿

宮四君」を致平親王四女に比定する従来の説に従って、当該の贈答歌

を掲出しておく。なお、西本願寺本『齋宮女御集』には、「兵部卿四

の君」を作者とする「紫にやしほ染めたる藤の花池にはひさすものに

ざりける」という歌が収められているが、冷泉家本や歌仙歌集本、『後

拾遺集』(春下・一五三)などによれば、これは徽子女王自身の歌で

あり、「四の君」の歌とは考えられない。平安文学輪読会[1981]・吉

野瑞恵 [2012] が指摘するように、西本願寺本では「兵部卿四の君」の後に冷泉家本の一五九・一六〇番歌が脱落しているものとみられる。

⑪ 『元輔集』(冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本)

入道の兵部卿の宮、土佐へ下りはべりし日、桂といふところにて、物語などして、入道の宮下りはべり、女三宮のまかり帰りはべりしに、よみはべりし

かつ見ても惑はれけるはゆきかへり妹背の山のをちこちの道

(一五三三)

▼【年譜】永延元年条参照。致平親王の土佐下向については他見がないが、その時期は出家した天元四年(882)五月から、保子内親王が死去する永延元年(981)八月までの六年間に絞られる。

⑫ 『万代和歌集』(龍門文庫蔵本)

兵部卿親王致平世をのがれて園城寺に住み侍りけるに、たづねまかりて侍りければ、花のいと盛りなりけるを見て

法成寺入道前撰政太政大臣

君がりと山路をわけて来るわれを花をたづぬと人や見るらむ

(雑一・二七七七)

▼致平親王と藤原道長との親交を物語る一首。致平親王と道長はともに源雅信女を妻としており、成信が道長の猶子となったのもその縁に

よるものであったという(『権記』長保三年(1011)二月四日条)。道長は寛仁元年(1011)十月に園城寺に参詣しているが(『年譜』同年条参照)、この歌は明らかに春に詠まれたものである。他の史料からは確認できないものの、道長は某年の春、桜の花盛りのころに、園城寺に致平親王を訪ねたことがあったのであろう。

⑬ 『続後拾遺和歌集』(書陵部蔵吉田兼右筆二十一代集)

植多おきて侍りける松の年久しくなりけるを見て

兵部卿致平親王

色かへぬ千年の友と思ひしに松もかひなく老いにけるかな

(雑上・九六九)

▼老境に入ってからからの歌と思われるが、詠作年時は不明。同じ詞書で『万代和歌集』にも収められている(雑二・三〇八五)。

⑭ 『栄花物語』(梅沢本)

齋院おりゐさせたまひて、御せうとの入道の兵部卿宮に对面せさせたまひて、聞えさせたまひける、

今日ぞ思ふ君にあはでややみなまし八十余りの年なかりせば

(三三九九)

いみじうこよなきほどの年月なりかし。いと若くて院にならせたまひ、兵部卿宮かたちことにならせたまひにしかば、いかでかは見たてまつらせたまはん。御はらからにぞおはしましける。

〔殿上の花見〕

▼【年譜】長元四年条参照。『続古今集』にも「選子内親王、賀茂のいつきおり給ひてのち、対面ありけるついでに」の詞書で入集しているが（雑下・一八一三／第五句「よはひならずは」）、作者名「入道兵部卿昭平親王」は「致平親王」の誤りである。選子内親王・致平親王のいずれが詠んだ歌であるのかについて、松村博司 [1976] が『栄花物語』の記述を誤りとして致平親王の歌とするのに対し、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進 [1998] は『栄花物語』の文脈に従って選子内親王の歌としている。浅田徹氏のご教示によれば、この歌は八十歳を超えている者の側が詠み送るべきものであって、「八十余り」も詠者自身の年齢でなければならず、従って『続古今集』の理解が正しいが、『栄花物語』は選子内親王は高齢であるというイメージを持っていたために、選子のみずからの年齢を「八十余り」と述べていると誤解したのではないかという。

### 【参考文献】

飯沼賢司 [1992] 「後家の力——その成立と役割をめぐって——」（峰岸純夫編『家族と女性』〈中世を考える〉、吉川弘文館、一九九二年）  
犬養廉・後藤祥子・平野由紀子 [1994] 『安法法師集』（『平安私家集』〈新日本古典文学大系〉、岩波書店、一九九四年）  
磐下徹 [2011] 「年官ノート」（『日本研究』四四、人間文化研究機構国際日本文化研究センター、二〇一一年一〇月）  
内田千代子 [1951] 「按察御息所（勅撰集の女流歌人）第十五回」（『学苑』一三—一三、昭和女子大学光葉会、一九五一年四月）

小野美智子 [2000] 「安法法師集の兵部卿官」（『国語国文』六九—八、京都大学文学部国語学国文学研究室、二〇〇〇年八月）

尾上陽介 [1991] 「親王の年官について——巡給制度の考察——」（『早稲田大学院文学研究科紀要』別冊一七〈哲学・史学編〉、一九九一年一月）

尾上陽介 [2001] 「年官制度の本質」（『史観』一四五、早稲田大学史学会、二〇〇一年九月）

片桐洋一・三木麻子・藤川晶子・三木麻子 [2010] 『海人手子良集 本院侍従集 義孝集 新注』（『新注和歌文学叢書』（青簡舎、二〇一〇年）

金田元彦 [1989↑1980] 「源氏物語における藤原兼家説話の投影」（『源氏物語私記』、風間書房、一九八九年。初出一九八〇年）

北村杏子 [1985] 「藤原相如伝素描」（『青山学院女子短期大学紀要』三九、一九八五年一月）

北村杏子 [1986] 「安法法師集の人々など」（『青山学院女子短期大学紀要』四〇、一九八六年一月）

木船重昭 [1992] 「中務集相如集注釈」（大学堂書店、一九九二年）

後藤昭雄 [2005↑1981↑1973] 「漢文学史上の親王」（『平安朝漢文学論考』、桜楓社、一九八一年。補訂版、勉誠出版、二〇〇五年。初出一九七三年）

後藤祥子 [2000↑1994] 『元輔集注釈』（『私家集注釈叢刊』（貴重本刊行会、一九九四年。第二版、二〇〇〇年）

小町谷照彦 [1990] 『拾遺和歌集』（『新日本古典文学大系』（岩波書店、一九九〇年）

酒井彰子 [1995] 「園城寺円満院門跡の創設と相承——円満院門跡系譜の検討を中心として——」（『文化史学』五一、文化史学会、一九九五年一月）

笹川博司 [2004] 「源成信論」（『京都女子大学宗教・文化研究所紀要』一七、二〇〇四年三月）

関口力 [2007↑1983] 「藤原成房・源成信」（『撰関時代文化史研究』、思文閣出版、二〇〇七年。初出一九八三年）

高橋由記 [2008] 「源成信について——『枕草子』と『栄花物語』を中心に——」（『大妻国文』三九、大妻女子大学国文学会、二〇〇八年三月）

高橋由記 [2010] 「和歌からみた村上朝の後宮」(倉田実編『王朝人の婚姻と信仰』、森話社、二〇一〇年)

時野谷滋 [1977] 『律令封祿制度史の研究』(吉川弘文館、一九七七年)

徳植俊之 [1985] 「藤原義孝の詠作活動——義孝集詠歌年次考——」(『横浜国

大語研究』三、横浜国立大学国語国文学会、一九八五年三月)

徳原茂実 [2006] 「清原元輔享年考」(『日本語日本文学論叢』一、武庫川女子

大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻、二〇〇六年九月)

所京子 [1989 → 1984] 「大斎院選子の仏教信仰」(『斎王和歌文学の史的研究』、

国書刊行会、一九八九年。初出一九八四年)

中川博夫 [2010] 『大式高遠集注釈』(『私家集注釈叢刊』(貴重本刊行会、二〇

一〇年)

中村義雄 [1962] 『王朝の風俗と文学』(『塙選書』(塙書房、一九六二年)

仁尾雅信 [1979] 「実方の説話的人物像の源流について」(『古代中世国文学』

一、広島平安文学研究会、一九七九年九月)

福井迪子 [1987 → 1975] 「藤原相如考」(『一条朝文壇の研究』、桜楓社、一九

八七年。初出一九七五年)

藤本一恵 [1989] 「清原元輔集全釈」(『私家集全釈叢書』(風間書房、一九八九年)

平安文学輪読会 [1981] 『斎宮女御集注釈』(塙書房、一九八一年)

松村博司 [1969] 『栄花物語全注釈』一(『日本古典評釈・全注釈叢書』(角川

書店、一九六九年)

松村博司 [1976] 『栄花物語全注釈』六(『日本古典評釈・全注釈叢書』(角川

書店、一九七六年)

三上啓子 [1990] 「源成信・藤原成房年譜——公任集の基礎的考察」(『国

文鶴見』二五、鶴見大学日本文学会、一九九〇年二月)

山中裕・秋山慶・池田尚隆・福長進 [1998] 『栄花物語』③(『新編日本古典文

学全集』(小学館、一九九八年)

吉野瑞恵 [2012] 「斎宮女御集」(『新藤協三・西山秀人・吉野瑞恵・徳原茂実』三

十六歌仙集』(『和歌文学大系』、明治書院、二〇一二年)

#### 付記

本稿の執筆に際しては、浅田徹氏(お茶の水女子大学)・末松剛氏(京都造形芸術大学)より懇切なご教示を賜り、千野裕子氏(学習院大学大学院)・お茶の水女子大学附属図書館・同大学文教育学部人文科学科比較歴史学コース・成蹊大学図書館には資料の閲覧に当たって便宜をお図りいただいた。記して厚く御礼申し上げます。